

『メアリ・バートン』の結末が意味するもの ——カナダ移住——

志渡岡 理恵

1 序

1848年に出版された Elizabeth Gaskell の最初の長編小説 *Mary Barton* は、1840年代後半から1850年代前半のイングランドの工業都市における社会問題を主題とした「産業小説」もしくは「イングランド現状小説」の代表作のひとつとみなされ、マンチェスターの労働者の生活を写實的に描いた作品と捉えられている。この小説では、労使の対立、極端な貧富の差が殺人という悲劇的な事件を生むまでにこじれ、作品全体が緊張感と悲愴感に満ちた重苦しい雰囲気包まれている。

そのような暗鬱なトーンが支配的なこの小説において、最後にやわらかな光を差し込んでいるのが結末のカナダの場面である。主人公のメアリと夫のジェム、生まれたばかりの息子ジョニー、義理の母親のジェインの4人が移住先のカナダのトロントで幸せそうに暮らしている姿を描いたこの最後の場面に、安堵のため息をつく読者は少なくないだろう。しかし、なぜ主人公一家は住み慣れたイングランドを離れ、海を渡り、植民地カナダへ移り住まなければならなかったのだろうか。この移動には、作者ギヤスケルの立ち位置とともに、当時のどのような歴史的事象が反映されているのだろうか。

本稿では、『メアリ・バートン』の結末が意味するものを2つの点、すなわち、移住という空間的移動が行われることと、移住先がカナダであることに注目して考えていく。『メアリ・バートン』の結末については、すでに複数の研究者が解釈を提示している。たとえば、Raymond Williams は、ギヤスケルがメアリの父とカーソンに与えたのは典型的な人道主義的解決であったのに対し、彼女が心から同情を感じていた登場人物たちに用意したのは、「現実に存在する難題を取り消し、同情すべき人物たちを妥協なき新世界へと移動させること」(91) だったと述べている。Grace Moore は、「おそらく、リアリズム作品の最も難しい側面は、小説に現実的な結論を与える必要性和、読者の『ハッピーエンド』を求める声の

拮抗だろう」(43)と指摘したうえで、ギヤスケルはメアリをカナダへ移住させることで現実味のあるハッピーエンディングを上手く作り上げたと論じている。ウィリアムズとムアに共通しているのは、イギリス国内でメアリが幸福に暮らすという結末は現実味のないものであり、そこで解決策として浮上してくるのが植民地への移住だという認識である。

ウィリアムズやムアらが言うように、『メアリ・バートン』では植民地カナダがイギリス国内で解決不可能な問題の受け皿となっているが、数ある植民地の中で移住先としてカナダが選ばれたのはなぜだろうか。本稿では、19世紀イギリスにおける移民の状況の変化をたどり、作品の舞台となっている時期にカナダがどのような場として意識されていたのかを探る。そして、1832年に夫とともにカナダへ移住した Susanna Moodie の *Roughing It in the Bush; or, Life in Canada* をはじめとするカナダ案内書などを手掛かりに、カナダ移住という行為が当時の人々に喚起したであろうイメージを踏まえ、『メアリ・バートン』の結末の意味を明らかにしていく。

2 19世紀前半の移民の状況

まず、19世紀前半のイギリスにおける移民のありようを確認しておきたい。Ashley Jackson と David Tomkins によれば、大英帝国の拡張に伴い、数百万人もの人々がイギリスを離れ、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカといった「新しいブリテン」(20)で新たな生活を始めるようになった。中でも人気の移住先はアメリカだった。Carter Hanson は、19世紀に移民したイギリスの人々の半分は植民地ではなくアメリカへと向かったと指摘し、これは彼らの「帝國的野望」が「金銭欲」ほど強くはなかったことの表れだと主張している (xiii)。つまり、移住の第一の理由は経済的なもので、移民の多くはアメリカこそが最良の成功のチャンスを与えてくれる場所だと信じていた、ということである。ならば、殺人容疑が晴れたとはいえ、マンチェスターで暮らしづらくなったメアリとジェムが移住するとしたら、移住先の候補として最初に挙がるのはアメリカのはずである。階級闘争が『メアリ・バートン』の主題であることを考えても、その犠牲者と言えるメアリたちが幸福を求めて移り住むのは共和制のアメリカこそが自然な選択のように思われる。しかし、ギヤスケルは主人公一家の移住先としてカナダを選んだ。なぜだろうか。

その理由を探るために、歴史の現場へ目を向けてみよう。1907年まで、イギリスからカナダへ移住する人の数はアメリカのそれを大きく下回っていた(Hanson xiv)。19世紀前半、移住先としてアメリカではなくあえてカナダを選んだ人々は、カナダの何に魅力を感じたのだろうか。この時期のイギリスからカナダへの移民に関する最近の研究は、中産階級のカナダへの移民の増加に注目しているものが多い。それは、この時期、政府が中産階級のカナダ移住を推進する政策をとっていたことが関係している。移住者の回想録を分析した Linda Peterson は、政府が中産階級のカナダ移住を援助・推進したのは、ローワー・カナダのフランス語圏に対抗するためだけではなく、「植民地に溢れている貧しいアイルランド系およびスコットランド系移民」とのバランスを保つためだったと分析している(56)。政府は、ナポレオン戦争終結後、仕事のなくなった将校たちを中心に、中産階級をカナダに送り込もうと、土地を与えるなどの援助を行った。1822年にアイルランドからカナダへ移住したアングロ・アイリッシュの Frances Stewart の手紙を編集した Jodi Aoki は、政府がそのような政策を行ったのは、まだ状況の不安定な植民地カナダに中産階級の人々を送り込んで定住させ、指導者の役割を担わせようという思惑があったからだとして論じている(51)。政府からの支援は、移住を考える中産階級の人々にとって大きな魅力だったに違いなく、その結果、中産階級のカナダ移住が増えたのだと考えられる。

中産階級ではないものの、『メアリ・バートン』の主人公一家のカナダ移住にも政府からの支援が大きく関わっている。ジェムがカナダ移住を考えるきっかけとなったのは、雇い主ダンカムからカナダでの仕事を紹介されたことである。ジェムがダンカムからトロントで働くことを提案される場面を見てみよう。

‘We have been written to by government, as I think I told you before, to recommend an intelligent man, well acquainted with mechanics, as instrument maker to the Agricultural College they are establishing at Toronto, in Canada. It is a comfortable appointment, —house, —land, —and a good per-centage on the instruments made. I will show you the particulars if I can lay my hand on the letter, which I believe I must have left at home.’ (362)

この一節で示されているのは、ダンカムから紹介された仕事が政府によるカナダ移住支援プログラムの一環だということである。政府が募集しているのは、ローワー・カナダのトロントに建設中の農業専門学校へ派遣する「機械に通じた頭の良い男性」で、該当者には「家」や「土地」が与えられる。これは、19世紀前半のイギリスで実際に行われていた政府による中産階級へのカナダ移住支援と一致する。牧師の妻で中産階級のギヤスケルは、このような政府の支援を知っていたと考えられる。「機械に通じた頭の良い男性」という条件をつけることで、ギヤスケルは、労働者階級のジェムにこの仕事が紹介されるのを現実離れしたものと受け取られないように工夫したのではないだろうか。

こうした政府からの支援に加えて、カナダには植民地ならではの魅力もあった。カナダは、距離ばかりでなく、政治的にも文化的にもイギリスに近い。ハンソンは、イギリスから独立したアメリカとは異なり、植民地カナダにはどこか「馴染みやすさ」があったのだと分析している (xxi)。母国と文化を共有するカナダは、イギリスの「忠順な妹」(xxii) だった。つまり、共和制のアメリカではなく、植民地カナダを移住先として選んだ移民たちは、あまり大きな変化を好まない保守的な傾向があったということになる。カナダへの移民の保守性については、他にも注目している研究者がいる。David Stouck は、18世紀から19世紀にかけてのアメリカとカナダの違いについて次のように述べている。

The contrast to the creative and forward-looking American experience in the eighteenth and nineteenth centuries is absolutely crucial to understanding a distinctively Canadian imaginative tradition. Seeking a haven in which to preserve customs threatened at home is imaginatively at the opposite pole from rejecting the old order and emigrating in order to begin anew. (432)

それまで暮らしてきた階級社会を拒絶し、新たなスタートを切ろうとアメリカに移住する未来志向の人々とは対照的に、カナダへの移民には、母国では保てなくなった生活基準を別の場所で維持しようとするノスタルジックな態度が見られたというスタウクの見解は、ハンソンの主張とも重なる。

ハンソンやスタウクの指摘する19世紀前半のカナダへの移民の保守性は、ギヤ

スケルが主人公一家の移住先としてカナダを選択した理由を考えるうえで、大きなヒントとなる。『メアリ・バートン』の結末では、ジェムがマンチェスターの友人からの手紙を携え、仕事から帰ってくる。その手紙には、懐かしい友人たちの近況が書かれている。

‘English letters! ‘Twas that made me so late!’

‘Oh, Jem, Jem! Don’t hold them so tight! What do they say?’

‘Why, some good news. Come, give a guess what it is.’

‘Oh, tell me! I cannot guess,’ said Mary.

‘Then you give it up, do you? What do you say, Mother?’

Jane Wilson thought a moment.

‘Will and Margaret are married?’ asked she.

‘Not exactly, —but very near. The old woman has twice the spirit of the young one. Come, Mary, give a guess!’

He covered his little boy’s eyes with his hands for an instant, significantly, till the baby pushed them down, saying in his imperfect way,

‘Tan’t see.’

‘There now! Johnnie can see. Do you guess Mary?’

‘They’ve done something to Margaret to give her back her sight!’ exclaimed she.

(379)

友人からの手紙をめぐって繰り広げられるこの楽しげな場面には、後にしてきた母国の友人たちに対するメアリたちの溢れんばかりの愛情が描かれている。手紙にはさらにウィルとマーガレットが結婚し、カナダを訪れる予定であることが書かれている。この場面で暗示されているのは、ジェムとメアリにとって過去（イギリス）は決別したものではなく、懐かしく、これからも関わりを持ち続けるものである、ということだ。階級制や極端な貧富の差に起因するブリテンの社会問題がいかにか大きくても、メアリたちは、イギリスを完全に拒絶するのではなく、少し距離を置いてそれとの友好関係を保持していく。このような関係は、アメリカでなく、植民地カナダにおいて保たれるのが自然だろう。そして、ここにギヤス

ケルの保守性を読み取ることもできる。

このように、19世紀前半のイギリスにおけるカナダ移住に関する歴史学の研究成果を踏まえ、『メアリ・バートン』の結末を読み解いていくと、主人公一家のカナダ移住には、当時の政府によるカナダ移住支援、カナダのイギリスとの地理的・政治的・文化的近似性が関係していたという結論が導き出される。これは本稿が提示するひとつの答えではあるものの、19世紀前半に実際にカナダへ移住した人々の声を検証すると、当時のカナダにおける階級間に関するさらなる重要な側面が明らかになってくる。

3 カナダ移住者の声

19世紀前半にカナダに移住した中産階級および労働者階級の経験とは、具体的にはどのようなものだったのだろうか。最初に、中産階級の元軍人の妻スザンナ・ムーディの『奥地で厳しい生活に耐える』を見てみよう。この作品は、1832年から1839年にかけてのアップパー・カナダでの生活をもとに書かれたもので、1852年にイギリスとアメリカで出版され、たちまちベストセラーとなった。ムーディ一家は、政府による中産階級へのカナダ移住支援を受け、1832年、よりよい生活を求めて海を渡り、現オンタリオ州東部の都市ピーターバラ北部の湖のほとりに居を構えた (Bigot 100)¹。

ムーディのカナダ案内書の序文からは、歴史の現場で個人がカナダ移住という行為をどのように捉えていたかがよく分かる。そこには、移住の動機、人気の移住先、カナダの魅力などが簡潔にまとめられている²。彼女は、カナダの魅力を次のように説明している。

Its salubrious climate, its fertile soil, commercial advantages, great water privileges, its proximity to the mother country, and last, not least, its almost total exemption from taxation—that bugbear which keeps honest John Bull in a state of constant ferment—were the theme of every tongue, and lauded beyond all praise. (10)

ここで注目すべきは、カナダの優れた点として、肥沃な土地や豊かな自然資源の他に、気候の良さと母国との近さ、免税が挙げられていることである。カナダは、

南アフリカやインド、カリブ海地域とは異なり暑くなく、オーストラリアやニュージーランドのように母国から遠く離れてもいない。また、カナダには1825年にカナダ会社が設立され、「イギリス政府の後ろ盾のもと五大湖北側のアップー・カナダへの入植事業が勧められた」（玉井93）。免税は、政府がおこなった優遇措置のひとつである。当時のカナダのイメージは、明るいものが支配的だったことが分かる。

しかしながら、ムーディの本意は、そのイメージを否定し、それとは正反対の現実を読者に伝えることにある。カナダの明るいイメージを想起したうえで、彼女は、カナダ移住を推進する人々は「これらの利益を確保するために耐えなければならない苦労や困難を注意深く隠している」（10）と述べ、彼らを批判しながら、彼らによって流布された明るいイメージを信じ込み、「カナダ熱」にうかされた中産階級を次のように描写している。

A Canada mania pervaded the middle ranks of British society; thousands and tens of thousands, for the space of three or four years landed upon these shores. A large majority of the higher class were officers of the army and navy, with their families—a class perfectly unfitted by their previous habits and education for contending with the stern realities of emigrant life. (11)

ムーディが詳らかにする「移民生活の厳しい現実」には、土地を開拓したり、日用品を遠くまで買いに出掛けなければならなかったり、暴動に巻き込まれたりすることの他に、「心は共和主義者で、自分を雇い主と同じくらい立派だと思っている使用人たちのずうずうしい馴れ馴れしさ」（11）という階級に関わるものもある。中産階級の移民がいくらか階級意識をふりかざそうとしても、相手がそれを認め、受け入れなければ階級社会は成立しない。カナダでの移民生活は、とくに軌道に乗るまでは、誰もが肉体労働をしなければ成り立たず、それが中産階級と労働者階級の境界線を明確にするのを困難にしていたであろうことは、容易に想像できる。要するに、19世紀前半のカナダでは、イギリスのような確立した階級社会は存在し得なかったということである。

これは、中産階級と労働者階級のカナダ移住者に、それぞれ利益と不利益をも

たらしたようだ。ムーディは、カナダ奥地への移住は「貧しく勤勉な労働者階級の人々には多くの恩恵をもたらすが、貧しい中産階級の人々には何ももたらさない」(330)と断言している。そして、中産階級の人々にカナダ移住を思いとどまらせることができたなら、自分の苦労は報われるとまで言っている。

If these sketches should prove the means of deterring one family from sinking their property, and shipwrecking all their hopes, by going to reside in the backwoods of Canada, I shall consider myself amply repaid for revealing the secrets of the prison-house, and feel that I have not toiled and suffered in the wilderness in vain. (330)

カナダを「牢獄」にたとえていることから、ムーディがカナダを中産階級の移住先としてふさわしくないと考えていたことは明らかである。そして、その大きな理由のひとつは階級の曖昧さである。中産階級の移民からすればそれは不満の原因であり、労働者階級の移民からすれば魅力だったのだろう³。とすれば、階級間の対立に苦しんだ労働者階級のメアリたちにとって、カナダは魅力的な移住先であったはずである。

次に、労働者階級のカナダ移民に関する記述を含む資料を見てみたい。ムーディのカナダ案内書からは、19世紀前半にカナダに移住する中産階級の数が急増したことがうかがえるが、移民の多くはやはり労働者階級だった。カナダへ移住した労働者階級の数の多さは、彼らにとってカナダが魅力的な移住先だったことの証左でもある。とくに貧しい人々にとって、カナダは人気の移住先だったようだ。ムーディは、お金はないけれども希望に燃える人々はカナダへ向かった、と記している(9-10)。前節で述べたように、ローワー・カナダには貧しいアイルランド系・スコットランド系移民が溢れていた。1841年に出版されたゲール語のカナダ移住ガイドブックを編集した Elizabeth Thompson は、1830年代にスコットランドの人々が移住を選択した理由として「蔓延する貧困」(xviii)を挙げている。1820年代から1860年代までの間にイギリスから北アメリカへ移住した71人の移民の書簡を分析した David Gerber によれば、カナダにはより貧しい移民の多くが集まっていた(14)。移住者のひとり Ralph Wade は、イングランドの人々があまりにもカナダを見くびっているのを、ヴィクトリア女王がカナダを訪れてく

れたらいいのにと、親類に手紙を書いている。

He [Ralph Wade] wrote of the desirability of “our beloved Queen Victoria” visiting Canada because, as he said on a number of occasions, the people of England thought “too meanly” of Canada, as backward, wild, and remote, and needed another source of information that pointed to the province’s rapid progress after 1840. (Gerber 19)

ここから分かるのは、カナダは 1840 年以降、急速な発展を遂げたにもかかわらず、「辺鄙で遅れた未開地」と馬鹿にされていると考えている移住者が存在した、という事実である。19 世紀前半のアップー・カナダへの移民の状況を調査した Elizabeth Errington も、とりわけアップー・カナダはアイルランド系・スコットランド系の貧しい人びと以外には適さない場所だと捉える人々がいたと指摘している (17-18)。

このように、19 世紀前半のカナダは、中産階級からすれば生活するのに多くの困難を伴う場所だった一方で、労働者階級には階級の曖昧さが利点となり、好ましい移住先だったと考えられる。実際にカナダへの移住を経験した中産階級の人々の声から浮かび上がってくるのは、カナダ移住推進派が宣伝する、中産階級が移住するのにふさわしい「明るいカナダ」とは異なるカナダ像、すなわち、むしろ労働者階級にとって魅力的な、階級が曖昧な社会である。

4 結論——メアリのカナダ移住

以上のことを踏まえて、『メアリ・バートン』の結末の場面を見直してみたい。メアリたちは、移住先のカナダでどのような暮らしをしているのだろうか。ギャスケルは、まず、一家が暮らす家と周囲の庭を描写してから、家の戸口に立つメアリへと読者の視線を誘う。

I see a long low wooden house, with room enough and to spare. The old primeval trees are felled and gone for many a mile around; one alone remains to overshadow the Gable-end of the cottage. There is a garden around the dwelling,

and far beyond that stretches an orchard. The glory of an Indian summer is over all, making the heart leap at the sight of its gorgeous beauty.

At the door of the house, looking towards the town, stands Mary, watching the return of her husband from his daily work; and while she watches, she listens, smiling,

‘Clap hands, daddy comes,
With his pocket full of plums,
And a cake for Johnnie’

Then comes a crow of delight from Johnnie. Then his grandmother carries him to the door, and glories in seeing him resist his mother’s blandishments to cling to her. (378-79)

メアリたちが暮らしている家は、閉塞感の漂っていたマンチェスターの住まいとは異なり、広々と開けていて明るい。太古からあった木々が切り倒され、庭や果樹園が作られているという描写からは、「未開地」が切り拓かれ、イギリスの生活様式が移植されているというメッセージが伝わってくる。そのような家で夫の帰りを待つ「家庭の天使」メアリの隣には、息子と義理の母親が優しく寄り添っている。この後、ジェムがイギリスからの手紙を持って帰ってくる。

ここで注目したいのは、このラストシーンには、カナダのイギリスとの地理的・文化的な近接性・類似性が示されているながら、周囲に他の家や人が描かれていないことである。つまり、カナダでのメアリたちの社会的立場を明示あるいは暗示するものはテキストから消されているのである。これは、メアリたちのカナダにおける階級を曖昧なままにするという効果を生む。Susan Zlotnick は、この結末について、「ギヤスケルは、否定しようとしたものを甘受し、メアリにマンチェスターでは拒絶したブルジョワの『無為』の生活をカナダで受け入れさせた」（87）と分析しているが、メアリは、カナダでイギリスでは叶わなかった中産階級への上昇を成し遂げたというよりは、イギリスと似てはいるものの階級が曖昧な植民地カナダという場所で家庭の幸福を手にした、と捉える方が妥当ではないだろうか。

本稿では、ギヤスケルの『メアリ・バートン』をとりあげ、結末で主人公一家がカナダに移住する意味について考察してきた。「産業小説」のひとつに数えら

れる本作品のラストシーンがカナダであるのは、階級間の衝突など工業都市の諸問題の解決がイギリス内では不可能だったことを暗示すると同時に、もし移住先を当時いちばん人気の高かったアメリカにすれば、主人公が階級社会のイギリスを捨て、共和主義のアメリカを選んだという印象を読者に与えてしまう恐れがあったからではないかと考えられる。アメリカほど共和主義色は強くないけれども、イギリスよりは階級意識の希薄な植民地、イギリスからさほど遠くなく、友人も気軽に訪れることが可能な場所、慎ましやかで家庭的でどこか馴染みのある場所、それがギヤスケルの思い描いたカナダだったのではないだろうか。

本稿は第25回日本ギヤスケル協会全国大会（2013年10月、於中央大学）におけるシンポジウム「Britain and Beyond——ギヤスケルと帝国」での発表に基づいている。

注

- 1 スザンナ・ムーディの弟はすでに1825年にアッパー・カナダに移住して成功していたので、彼女には、その例に倣おうという思いがあったのかもしれない。また、彼女は、カナダへ移住する前、すでに多くの詩や短編を雑誌に寄稿しており、1831年には詩集も出版していた（Bigot 100）。
- 2 序文には、1826年から1829年まではオーストラリアが人気の移住先だったのに対し、1830年に入ると移民の大きな波が西へと向かい、お金はないけれども希望に燃える人々はカナダへと向かった、と書かれている（9-10）。
- 3 スザンナ・ムーディの姉で、元将校 Thomas Trail と結婚した Catharine Traill も、*The Backwoods of Canada: Being Letters from the Wife of an Emigrant Officer* というカナダ案内書を書いている。トレイル一家は、政府からカナダの土地を提供され、ムーディー一家の後を追うようにカナダへと向かい、同じようにピーターバラ北部の湖のほとりに移り住んだ。1832年から35年にかけてのカナダでの経験をまとめたトレイルの『カナダの奥地』は、ムーディの『奥地で厳しい生活に耐える』よりも早く1836年にロンドンで出版された。彼女も妹と同様に、カナダへ移住する前にすでに詩や短編、子供向けの本を出版している作家だった（Bigot 100）。トレイルのカナダ案内書は、ムーディのもの

同様、中産階級に向けて書かれたものだが、特徴的なのは中産階級の女性を
読者として想定していることである。序文の冒頭で、トレイルは、ここ 10
年の間にカナダ移住に関する本が多く出版されたけれども、移民の家庭を取
り仕切る女主人の手引きとなるようなものはほとんどないので、これからカ
ナダに移住してくる女性たちに必要な情報を提供するためにこの本を書いた
と述べている。そして、現実よりもよく見せかけることは残酷なので、あり
のままの真実を語ると宣言している。この姿勢はムーディと同じだが、トレ
イルの案内書は、中産階級にカナダ移住を思いとどませようとする悲観的
なムーディのもの比べると、女性たちに覚悟を決めて上手に困難を乗り越
えていくように励ましていて、实际的で明るい。

Works Cited

- Aoki, Jodi Lee. *Revisiting "Our Forest Home": The Immigrant Letters of Frances Stewart*. Dundurn, 2011.
- Bigot, Corinne. "Did they go native?: Representations of first encounters and personal interrelations with First Nations Canadians in the writings of Susanna Moodie and Catharine Parr Traill." *The Journal of Commonwealth Literature*, vol. 49, no. 1, 2014, pp. 99-111.
- Errington, Elizabeth Jane. *Emigrant Worlds and Transatlantic Communities: Migration to Upper Canada in the First Half of the Nineteenth Century*. McGill-Queen's UP, 2007.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*. 1848. Oxford UP, 2006.
- Gerber, David A. *Authors of Their Lives: The Personal Correspondence of British Immigrants to North America in the Nineteenth Century*. New York UP, 2006.
- Hanson, Carter F. *Emigration, Nation, Vocation: The Literature of English Emigration to Canada, 1825-1900*. Michigan State UP, 2009.
- Jackson, Ashley, and David Tomkins. *Illustrating Empire: A Visual History of British Imperialism*. Bodleian Library, 2011.
- Moodie, Susanna. *Roughing It in the Bush*. 1852. W. W. Norton & Company, 2007.
- Moore, Grace. *The Victorian Novel in Context*. Continuum, 2012.
- Peterson, Linda H. "Reconstructing British Domesticity on the North American

Frontier.” *Victorian Settler Narratives: Emigrants, Cosmopolitans and Returnees in Nineteenth-Century Literature*, edited by Tamara S. Wagner, Routledge, 2011, pp.55-69.

Stouck, David. “‘Secrets of the Prison-House’: Mrs. Moodie and the Canadian Imagination.” *Roughing It in the Bush*, by Susanna Moodie, edited by Michael A. Peterman. W. W. Norton & Company, 2007, pp. 425-433.

Thompson, Elizabeth. Introduction. *The Emigrant’s Guide to North America*, by Robert MacDougall, Natural Heritage, 1998, pp. vii-xxiv.

Williams, Raymond. *Culture and Society 1780-1950*. Chatto & Windus, 1958.

Zlotnick, Susan. *Women, Writing, and the Industrial Revolution*. Johns Hopkins UP, 1998.

玉井史絵「第四章 国家——自由貿易主義の帝国のなかで——」『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化——生誕二百年記念——』松岡光治編, 溪水社, 2010, pp. 83-100.

Abstract

What Does the Ending of *Mary Barton* Imply?: Emigration to Canada

Rie SHIDOOKA

At the end of *Mary Barton*, the heroine, Mary, emigrates to Canada with her husband, Jem, and his elderly mother because he has been appointed instrument maker to the Agricultural College in Toronto. The last scene describes their new, spacious cottage with a garden and an orchard, along with Mary's happy life as an 'angel in the house,' awaiting the return of Jem from work. They seem to have established an 'English' home in Canada, but why did they have to leave their English hometown and start a new life in Upper Canada? This article discusses what the ending of *Mary Barton* implies.

It seems that the last scene reveals Gaskell's vision of Canada. In the first half of the nineteenth century, British people were attracted to Canada because of its abundant land; its geographical, political and cultural proximity to their home country; and the British government's aid such as exemption from taxation. In addition, Canada, unlike the United States, was not a democratic country. If Mary had emigrated to the United States (the most popular destination for British immigrants in those days), it would have meant she was rejecting Britain and expressing a preference for the society of the American republic. Gaskell would not have given such an impression to her readers.